

美術科指導案

平成19年 2月 1日 第5校時
宇都宮市立一条中学校 1年5組
(男子14名・女子15名・計29名)
授業者 青木孝浩

1. 題材名 清水登之「戦蹟」を鑑賞する
～対話型鑑賞による作品鑑賞～

2. ねらい

(1) 作品を見たり教師の問いかけに対して自分の考えを発表したり、友達の意見を聞きながら考えることができる。また、地元ゆかりの作家に対して興味関心を持つことができる。
(関心・意欲・態度)

(2) 作者の気持ちや表現の工夫に気づき、対話型鑑賞法により自分の考えを発表したり、友達の意見を聞いたりしながら、自分の考えを深め、作品に対する自分の解釈や考えを持つことができる。
(鑑賞の能力)

※鑑賞の内容 第1学年のAの内容に準ずる。

3. 題材について(設定の理由)

県美術部会及び市美術部会の研究テーマ「生活に生きる美術教育の創造」を受け、鑑賞の授業を考えたとき、ちょうど、県立美術館で展覧会も行われている地元ゆかりの作家であり、独特の場面絵的な作風が特徴の清水登之の作品を使うことを思いついた。また、対話型鑑賞を行うということで、中学校1年生という段階を踏まえ、想像力を働かせて見ることができるであろう抽象、もしくは半抽象の作品か、画面の中で多くの出来事が起こっている作品がいいのではないかと考えた。清水登之の作品には、この条件に当てはまる作品が多いが、今回は、多くの意見の交流を試みる事が可能で、自分なりの解釈が作りやすいと思われる半具象的な作品「戦蹟」(別資料参照)という作品を選んでみた。

作品の中に描かれていることを丁寧に観察し、描かれているものやその描かれ方などを元に互いの意見を共有しあい、自分なりの作品解釈ができるようにしていきたい。

また、地元栃木県出身の画家ということで、親近感を持たせ、興味関心を深めることができれば、と考えている。

4. 生徒の実態と身に付けさせたい力

作業が好きな生徒が多く、制作活動は熱心に取り組むが、深く追求したり考えたりすることは苦手な生徒が多い。入学時に行った学習アンケートからも表現活動への興味関心の高さは伺えたが、鑑賞に対する興味は低く、美術館に全く行ったことのない生徒も半数以上いるという結果であった。そこで、実態に合わせ、まずは鑑賞そのものに興味関心を持ってもらおう、抵抗感を減らそう、という目標を立て、対話や追体験による鑑賞や物語をつくる鑑賞等を行ってきた。しかし対話型鑑賞については、意見を出すことで精一杯になることも多く、自分なりの解釈を考え、深めていくということについては不十分であったと思われる。

この授業をとおして、対話が進むことによって、自分の考えが広がったり、新しい解釈が生まれたりすることで考えの深まりを実感させながら「見る目」を養い、積極的に鑑賞しようという気持ちを育てたい。

5. 評価規準

- ・ 自分の考えを発表しようとしたり、友達の意見をよく聞こうとしたりしており、積極的に鑑賞しようという意欲が見られる。 (関心・意欲・態度)
- ・ 対話型鑑賞をとおして友達の価値観を受け入れながら自分の考えを深め、より創造的に鑑賞し、自分なりの解釈を作ることができる。 (鑑賞の能力)

6. 評価基準

項目	関心・意欲・態度	鑑賞の能力
評価方法	観察	学習プリント・観察
A (十分満足)	進んでねらいに即した意見を発表し、先生の問いかけに自分の考えを発表することができ、友達の意見もよく聞いている。また、作者の他の作品も見ようと思ったり、実際に美術館で作品を見ようとする気持ちが表れている。	作者が制作した時の <u>気持ちを考えた</u> り、表現の工夫について <u>想像力を働かせながら考えたり</u> することができ、作者の心情に迫ることができる。また、感想には <u>しっかりとした根拠がある。</u>
B (概ね満足)	進んでは意見を言えないが、先生の問いかけには自分の意見を言うことができ、友達の意見を聞く態度がよい。	表現の工夫について、ねらいに即した自分なりの考えを持つことができる。根拠もはっきりしている。
C (不十分)	ねらいにそぐわない発言をしたり、先生が質問しても全く答えられない。また、友達の意見を注意して聞くことができない。	「すごい。」「うまい。」など単語でしか意見が書けず、考えの根拠もはっきりしない。
不十分な生徒への支援	発問を工夫し、生徒の立場に立った言葉で発問するように心がける。	どこがきっかけで自分の考えが持てたのか、根拠を少しでもはっきりさせる。

7. 授業の観点

「初発の感想をより深めるための工夫」

始めは画題を教えずに「作品の中で何が起きているか。」「どんなものが見えるか。」という対話型の基本的な質問から始め、発想を広げていく。そして、対話の流れで、「絵の題名を伝える」か「自分でタイトルを想像する」ことを行い、それを通して新たに見えるものが変化することを感じさせながら、最後に作者が作品をとおして伝えたかったことを想像させる。

題名を伝える場合は、初発の感想の内容が乏しかったり、発言が少なかったりすることも考えられるので、その場合に題名を明かすことで発想のきっかけを作り、深めさせたい。



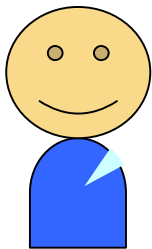
鑑賞作品：清水登之「戦蹟」

1年 組 氏名〔 〕



清水登之 作

みんなの意見を聞いたり，自分で考えたりしてみて，作品に込められた作者の思いや表現したかったこと想像して，自分の作品に対する考えを書いてみよう。



【自己評価】 A, B, C, D に, ○をつける

1. 自分の意見が言えた。 A ・ B ・ C ・ D
2. 友達の発表がよく聴けた。 A ・ B ・ C ・ D
3. 友達の意見は参考になった。 A ・ B ・ C ・ D
4. 自分なりの解釈ができたと思う。 A ・ B ・ C ・ D
5. 積極的に鑑賞できた。 A ・ B ・ C ・ D
6. 美術館で本物, または, 同じ人の異なった作品を見てみたいと思った。 A ・ B ・ C ・ D